

明日の保育を考える

親と子と保育者との出会いをめぐって

—クラス・デイの記録を通して—

小 泉 庸 子

はじめに

「明日の保育を考える」——子どもとの出会い——という視点を持って、私共の保育研究グループに於て、保育観察の記録を中心に、幼児と保育者が互いに影響を及ぼし関係しあい、互いに共感し、互いに成長して行くことなどを学んでいった。そして、この幼児をとりまく大人、親と保育者との出会いについても考察してみることにした。

親にとって子どもの入園は、子どもと同じく入園前と異なるいろいろな感情や経験を持つことであろう。子どもがその子なりの経験をし成長する背後に家族があり、成長を喜び助け受け入れている。この子どもを取りまく家族、主として両親と幼稚

園が互いに関係し合うことにより、この中で単に子どもの成長だけでなく、親も保育者も互いに成長しあう存在としてあるのではないか。この関係の深まりを親と保育者との出会いの中に見ることができないのではないか。

この出会いの場の一つとして我が園でクラス・デイと名づけている活動を考察してみようと思う。

クラス・デイについて

〈方法〉

親と保育者はいろいろな場で関係し合っているが、特に理解を深め合うためのプログラムとして、保育参観と懇談会をあわせて持つそのクラスの日、すなわちクラス・デイと名づけた。

この日、家族は都合のよい時間にお弁当を持参し参園する。そして子どもの遊びを見たり、共に活動し、子どもの生活にふれ、他の子ども名前を知ったり、親同志が知り合ったり、保育者との関係を深めたりする。この日、他のクラスは短縮保育とし、他のクラスの保育者も、親や子どもとの交りを持つよう、幼稚園全体がこの日は、そのクラスの日となるのである。

〈プログラム〉

登園から十一時三十分まで子どもの普段の活動を親は見たり参加したりする。

十一時三十分、おべんとう。他のクラスの子らは降園、他のクラスの保育者もみんな一緒におべんとう。

十二時十分から一時三十分、親と保育者との懇談、子どもは遊び、他のクラスの保育者は、子ども係と懇談会に出る係とに分かれる。

〈懇談内容や形式について〉

クラス毎にテーマを持ち、クラス担任や親から発題し、問題提起をし懇談を始める。懇談はクラス全体で行なったり、グループに分かれて行なったりした。また、懇談の前又は後に、担任より子どもたちの園生活のようすや記録などを報告する。

〈テーマ〉 今まで行なったもの

三歳児クラス

- 。三年保育の中での成長をみる
- 。子ども・親・保育者の出会い
- 。友だちと出会って行く過程
- 。三歳児に育つもの
- 。遊びとその人間関係

男の子の遊び、女の子の遊び

四歳児クラス

- 。子どもと遊び——友だち関係
 - 。ことは——自分を表現する
 - 。友だちの広がり——四歳のグループ
 - 。友だちを受け入れること
 - 。家庭に於ける子ども様と幼稚園に於ける子ども様子の様子
- #### 五歳児クラス

子どもとは

- 。二年・三年間の幼稚園生活をふりかえって
- 。子どもの独立について
- 。もう一度子どもの成長をみる
- 。子どもを取りまく環境について
- 。一年生を前にして

親と保育者との出会い——クラス・デイの記録とそ

の中で学んだこと——

一、親が我が子を再発見する時となる——三歳児S夫の母のことば「子どもの遊びはめまぐるしく変わる。家だと一人っ子だから飛び廻ったり、跳ね廻ったりする姿は想像できなかった」

二、親が自分の子以外の子について再発見する時となる——四歳児R夫の母「Tちゃんとても遊びが上手で友だちのめんどう見がいいですね」

三、親が自分自身を見なおす時——五歳児T子の母「今、自分は、自分の母と同じように子どもをしかっている」

四、親同志が学びあい支えあう時——五歳児F子の母「外国の人はよく自分の子どもをほめることができるときくが、自分たちはなかなか子どものよいところが見つからないし、ほめることができない」という発言により、みんなで自分の子どもの良い点について考え紹介し合った。

五、幼稚園に対する疑問や不安や希望を出し合う時——四歳児R夫の母「先生たちから、子どもの気持ちを考え大切にすることを教えられた。しかし自由な遊びの時はいいのですが、一斉の時、全体の迷惑を考えなければいけないことを教えてほし

い。うちであまり怒るから、幼稚園でその反動としてああい行動に出るのだろうか」

六、保育者が子どもや親についてより理解が深まる時——五歳児M夫の母（テーマ子どもの独立について）「年少組の時からみて、年長組になった今はずい分成長していると思う。親を信じきって親から離れて行くことができているのではないかと思う反面、先をきって離れて行くかも知れない。自分から離れて行く時、気も動転して泣けて来るのではないかと思う。でもその時笑って見守ってやれる親になりたい」

七、保育者が親に支えられ教えられる時——四歳児K夫の母「幼稚園では、子どもをあるべき姿に導いてくれることがよくわかる。成長の段階によって子どもの話の中に出て来る友だちの名前が増えてくる。家にいる時は、特定の枠の中でしか遊べない。しかし、幼稚園ではその枠からはずれて、いろいろな人と出会えて、遊べて良い。先生が友だちと出会わせてくれる。今日、子どもが名前を言っていた人のお母さんに会えてとてもうれしい」

八、親が保育者に支えられ教えられる時——三歳児H夫の母「下に赤ちゃんが生まれたためか落ち着きなく、うるさくて困る」

その後いろいろ話し合った後、担任より保育記録メモを通して子どもの活動を報告した。これを見てH夫の母「いろいろ考え、集中力があるんですね、家に居ても空箱とセロテープで工夫して作ったりするんです。アイデアがおもしろいです。創造力が豊かです」と自分の子どもを肯定的見方から肯定的に見ることができた。

九、子どもに大人が教えられる時——四歳児S夫の母「S夫が言うには、幼稚園には強い人がいる。僕は強い人がまんしていると楽しく遊べるんだよ」と園生活を報告しています。親としてこれをどう受け止めて行ったら良いのかとまどっています——このS夫が提起した問題については、保育のあり方に関する問題が含まれていると、母も保育者も受け止めたが、この発言の時は、懇談の内容として全体に広げなかった。

十、保育者が、他のクラスのことについてより理解を深める時——前九の事例などを通して、保育内容について、子どもの感じ方、等について話し合いを行ない、学ぶことが多かった。

年齢別に親の発言の傾向を記録の中に見ると、三歳児クラスは、子どもそれぞれの活動や個性や成長の違いなどをその子どもそのままの姿として受け止め受け入れて見て行こうとする姿

勢が多く見受けられた。この理由としては、三歳児のクラスは比較的人数も少なく（十名―十六名）また、三年保育に入園を希望する親の意識のレベル、又、まだ三歳で小学校という枠に入る生活にはまだ時間がある等の考えもあるようである。

四歳児クラスは、三年保育から上がった子どもと新入園児との混合クラスであるが、親自身の葛藤か、四歳になると一般的に幼稚園に入れるという考えなどからか、他の子どもと比較したり、具体的、個人的な自分の子どもの問題により多く目がむけられているようであり、幼稚園の方針に対する疑問、不満、無理解等も出される。（幼稚園で遊ばせてばかりいるとか、○
○幼稚園では字や英語を教えているのにとか、五十音を教えてほしい、スモックを着用してほしい等々）

五歳児クラスは、すでに親同志も二年目、三年目と子どもや幼稚園を通して関係ができていたためか、懇談の問題点をしぼり、親同志の学び合い支え合いなどがスムーズに行なわれる。そして、親同志が具体的に問題の対処の仕方、申し合わせ事項などを作り出して行った。その例として、○親と子の自転車の乗り方十のやくそく、○お小使いについて、与え方、○子どもが互いに他の家に遊びに行った時のおやつとの与え方、遊び、かたづけ、帰宅時刻等の申し合わせ、○テレビの見方、等々、親

としての取るべき態度、姿勢等をクラスの方向約束等として申し合わせたりした。

一親として、一番目の子どもと二番目の子どもに対する気持ちの違いに気が付き、他の親に対しても自分の経験などを話して力になり合ったりしている。特に一番目の子どもの時は、子どもの受け止め方なども、不安定で、あせりなども見られるが、二番目、三番目の子どもの時になると、成長への見通しがもてる、などに変わって行っている。例として、小学校入学準備、文字の習得についてとか、幼稚園での活動、あそびの受け止め方等についても、子どもの可能性を信じ待つことを、親からの発言等は最初の子どもの親にとっては、納得しやすいようである。

保育者としては、親の子どもに対する思い、経験、見方、受け止め方、悩み等を知り、保育に立つとき、より近くに子どもを感じ、より深く、子どもと共感できたりする。保育者は、自分の子どもを出産したり育てたりした経験のない者が多く、親の子どもに対する鋭い直観や、深い思い、願いの中に子どもの成長を支え助けるものがあることを学んだ。

今後の方向について

世界的傾向として、家庭教育より施設教育依存が強まっている中で、親も、保育者も、子どもをよりよく知るためのプログラムの作成とその展開、実践、検討が必要であると思う。また、保育者は、親の持つ直観や、深い思い願いを理解し受け入れることができるゆとりをもつことができる力の貯えが必要であると思う。

終りに

幼稚園は、子どものことのみにとどまらず、親と保育者との関係を深め、出会うことを求めて行く時に、互いに認め合い、受け入れ合い支え合うことは、親は親として、保育者は保育者として、それぞれよりよき明日への歩みを進めることができることを学んだ。そして、この両者の歩み、成長、共感、支え合いに変わって行く出会いは、子どもによって実現し、子どもの明日を生きる支えともなることと思う。

(東奥義塾幼稚園)